

池ができれば次は植物か。池に合う植物を探していたら、お隣で増えて持て余しているクレソンを整理するとの情報をもらって、さっそくいただいてきた。急な話だったのでとりあえず、池の端に植え込んでみた。

でもやはり本命はスイレンだろう。さっそく庭木や野草を売っている園芸店に相談にいった。店のひとも庭の池はイメージできるが、原野に掘って作った池で育つスイレンとなるとあまり自信がなさそうだったが、少し小型のスイレンのヒツジグサならなんとかなるかもしれないとのことだった。ただ、水深は最低でも三十センチメートルはないと冬越できないのではないかと言われた。それも手に入るのは六月末になるという。がっかりした表情を読み取られたのかエンコウソウという黄色の花の咲く水辺を好む植物をおまけにくれた。

さっそくエンコウソウを岸辺に植えたが、ヒツジグサを植えるのはそう簡単ではなかった。一旦通水した池を三十センチにヒツジグサを植える深さをプラスしたところまで掘り下げるのは容易ではない。まずは股まである長靴を調達し池に入ってみたが、足を入れて移動するたびに底の土がかき回され水がどんどん濁ってしまう。池の底にスコップを突き立ててもどこがどう掘れているのか確認ができない。それに大きな石に当たることも一度ではない。ここは原始的試行錯誤ではなく、周到に計画して臨むべきだったと反省した。

六月末によくやく色の違う三種のヒツジグサの株を手に入れることができたが、店のひとが言うにはそのまま土に植えても浮力で株が浮いてくるので、石をくりくりつけるなど重りが必要だとのこと。これも通水前ならやりようがあったがさてどうするか。結局、ハンギングバスケットの網にシュロを敷き、そこに苗と土を入れ、最後に上に重しの石を乗せてバスケットごと沈めることにした。バスケットをつるすチェーンを持ち上げながら静かに目的とする場所に沈めると、これが意外とうまくいってなんとか池におさまってくれた。

川と池を掘った頃は一面茶色のモノトーンの世界だったが、五月になると水辺も淡い明るい緑色に変わってきた。そして六月に入ると早々にクレソンの白い花が咲き始めた。それを追うように六月の半ばにはおまけにもらったエンコウソウが黄色の花を咲かせた。こちらの春ははじめはあまり彩がないなかで、白い花と黄色い花が点々と咲く姿は心を和ませた。七月に入ると六月の末に植えたばかりのヒツジグサも負けじと花を咲かせた。

池の水も暖かくなってきた。アメンボウやミズスマシ、そして長いオールで泳ぎをするのマツモムシなど、水中昆虫の種類と数が一気に増えてきた。それにトンボも灰色のシオカラトンボや細身で鮮やかな青のイトトンボ、時には大型のオニヤンマまで池の水に惹きつけられてきた。

いち早く「石塚さんのいえに池ができたよ。」と生き物通信にのったのだろうか。八月に入るとオタマジャクシがいっぱいいるのに気が付いた。卵を見た記憶がないのだが、そもそも池をつくって数ヶ月でカエルが卵を産むなんて想像もしていなかったので見落としたのかもかもしれない。

